

---

# 事故にあった私は異世界にて

万華鏡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

事故にあった私は異世界にて

### 【Zコード】

Z0164Z

### 【作者名】

万華鏡

### 【あらすじ】

事故に遇つて目覚めたと思ったら全く知らない場所にいた青羽。  
「シリアルス・・・え、やっぱギャグ?でも、シリアルスっぽい」な激しい展開です。

なんだかすごくウザつたい魔法使いや世話係になった青年や、青羽を異世界に召喚した張本人のめっちゃ可愛い男の子たちと紡ぐ何がしたいのかよくわからなくなつたストーリー!!

皆さん、こんにちは。私は青羽あおはと申します。

18歳です。めでたく高校卒業しました！！

無事就職先も決定し、就職祝いにキャンパスしてこられたのでした。

・・・でも、今ピンチです。ものすごく。

キイイイイイイイイイ！――！

近づく車のブレーキ音。

それが、この距離じゃもつ間に合わないだろ？とこいつらまで近づいてきていた。

・・・今は単独行動中なので、近くに知り合って等々はおりず。

ドカッ！！

何も抵抗することもできずに、あっけなく私ははねられた。

つていうかこれはないよね。うん、無い。あの車勢いよく走りすぎ。ただでさえ見渡し悪いのに、ほかに通行者がいなかつたからって全速力で飛ばすことないよね。しかもどこ見て走ってるの。ちゃんと前は見なきや。

・・・まあ、左右確認せずに道路を渡ろうとした私も悪いんだけども。

このまま死ぬのかな」とか思いながら、宙を舞つていいの最中私は意識を飛ばした。

「ふああ～・・・ねむい・・・・・?つて、なんで私無傷?むしろここ何処。」

そして、車に轢かれて意識を失っていたはずの私が目を覚まし倒れていた場所は・・・

森

だつた。

…………つて、よく考えてみれば森で轢かれたんだからおかしくはないのか……ん？でもなんで轢かれたんならまだ森にいるんだ？ここは普通病院とか……救急車とかじや……。  
…………もしかして私、捨てられた！？証拠隠滅か。そうなのかな！？  
…………よりむしろこの状況はそれしか考えられないしつ！！

「マジか・・・」

も「そんな言葉しか出でこない。」

・・・い、いや。これはまだラッキーな方かもしない。殺されなかつただけましだ！！とにかくまず助けを呼ぼう。近くに家は

当たり前じゃん、ここ森だし！え、何これ死ねって言ってんの？いやいやいや、待て。ここがさつき轢かれた森なんだとしたら誰か探

してくれてるかもしないし、近くにキャンプとかで来ている人もいるかもしれない。とにかく人を探そう。

「つて言つても……どこ見渡しても木しかないし。……まあ、森だから当たり前か。」

そう呟きながら立ち上がった時、コトンと何かが落ちる音がした。

「ん？……あ、ああ！……この手があつたか！？」

それは現代人……しかも社会人ならだいたいの人は持つてているであろう便利通信機、携帯電話。かみさま私の心の相棒である。とまあそんな冗談は置いといて、さっそく親の携帯に電話することにした。

・・・が。

「まさかの圈外……？」

泣きそうになつた。いや、泣いてないけどね？私そんな弱い子じゃないからね。

とりあえず電話帳にあるすべての人達に片つ端から電話をかけてみたが、どれも圈外で駄目だった。なんで。ここが森だから？

「……泣いてもしょうがないか。」

そう、しょうがな……くはないような気がしないでもないけど。泣いていたつて何も始まらない。一步も歩けないような大けがしてるつてわけでもないんだし……というか、あのスピードで車に轢かれたにしては如何せんこの無傷ぶりはおかしいくらい何もないし。とりあえず、寝床＆助けを求めるために歩き回ることにした。

人を探し始めてから約15分。何処を歩いても、人影どころか生き物の気配一つしない。

運動神経抜群な私でもいい加減疲れてきた。というか、まず精神的に疲れてきた。

そんなこんなで、ちょっとしたホームシックかなんかに陥っていたら、急に視界が開けた。

「うわあ～～～っ！！」

そこはまさにオアシス。とても透き通っていて綺麗な湖があった。家とかではなかつたけど。今まで全く変わらなかつた景色に変化が起つたのは、素直にうれしいと思う。

「せっかくだからちょっと休憩しようかな。」

少しだけ前向きになれた私は、今の状況を少しの間だけでも忘れて、気分を少しでも紛らわせるように明るくその言葉を吐き出した。

湖の水に触れてみると、冷たすぎずかと言つてゐるすぎず。本当に適温と言つていいくらいの温度だつた。この湖を独り占めできるのはちょっと嬉しいかも。調子に乗つた私は、周りに誰も人がいないことを確認してから、服を脱いで湖に浸かつた。一人だからこそできる贅沢だ。今初めて少しだけこの境遇に感謝してしまつた。

・・・まあ、すぐに地獄に突き落とされることになつたんだけども。

「気持ちいい・・・」

何分か浸かっているうちに、ちょっとした感傷に浸つてしまつて。いつの間にか、目からは涙があふれていた。もう大人なのに情けない、と思いながらもやつぱりそれは止まることはなくどんどん溢れて零れていく。

そんな時、何処からか男の人の声が聞こえてきた。

「君、誰？そんなこと何してるの。」

「え・・・・・・」

ひと。人だ。人間。  
・・・・・ということは私・・・このまま野宿とかしなくて済む！？  
などとこの状況では若干的外れなことを考えてしまつた私。待て、  
落ち着け。・・・今私、どんな格好してる？服何処にある？

答え……青年の足元。下着もろとも。  
・・・・・・うつ・・・・・。

「つぎやあああああつつつ！…？」

流れでいつの間にか近くにいた青年を殴つてしまつたのはしじょうがないことだと思う。ごめんよ青年。だがもっと空氣を読んでほしかった。服足元にあつたの気づいてただろ。なんでそれでせらに近づいてくるんだよ。ありえないよ。

・・・つてことで、もう少し落ち着く時間を下せい。

「・・・で、ゴメンナサイは？」

「御免なさい」免なれど「めんなれど」メンナサイ・・・」

・・・ちょい前言撤回させてください。先ほど青年に心中で謝ったのなかつたことにしてください。こいつ最低な奴だった。碌でもないよ。なんで思いつきり殴つたはずなのに無傷なの。その上めつちや穢やかではない笑顔を浮かべていらつしゃるおお怖い。

あ、因みにもう服は着たよ。当たり前だけどね。つてことで何とか落ち着いた私は、青年に泊めてもらつように頼むことにした。だつてほかに人間・・・というか生物すらいないし。虫の一匹もいないよ。虫は嫌いだからそこは喜ぶべきところなんだけど。

「・・・まあ、いいや。で、君はなんなの。なんでこんなところにいるの。」

そこは疑問形で語尾が上がるはずなのに上がつていらない青年。え、こじ答えるといふ・・・だよね。そう思つた私は、丁寧に答えて差し上げた。

「私は青羽と申すです。（多分）証拠隠滅の為この森に捨てられました。」

因みに口調がコレなのはちょっとした反抗心が働いただけだと思つてください。そして華麗にスルーして下さつたら尚嬉しいです。常識人な私は言つていてちょっと恥ずかしくなつてしましましたので。

「家は？」

「日本です。」

「……ジニア」。

「は？」

何言つちやつてんのこの人。ちょっと[冗談で言つただけなのに。だつてこの日本でしょ？]ちょっとしたシッコリ待つてたのになんでんたがボケんの？日本だよね。私日本語喋つてそれこの青年にも通じてるもんね？むしろそうだと言つてくれ。……す、ぐ。す、ぐ。す、ぐ。お、く。嫌な予感。これ、何フラグですか？

「えー、とお……念のため聞いておきますが、この何処ですか？」  
「森だけど。」

「いやそれはわかつてんですよ。地名とか国名とか聞いてんですよ。」

「君が何言つてるのか分からんだけビ。」  
「……えええ～……？」

どつこいことだ。もし……もしも、このが日本でなくとも、少なからずどの国や世界にも国名や地名はあるはずだ。……あ、そつか。この青年がおかしいだけだ、これは。何かの病気かな、可哀想に～。まあそれは置いといて、このままこんなことはなしていくとも埒があかなさそうなので。

「家に泊めてくださいといつれしいです。」  
「嫌だよ面倒くさい。」  
「まさかの即答つー？」

「う、この青年には人情といつものが備わつてないようだ。仮にも女子を見捨てるなんてひどい。そんな私の軽蔑するような視線に気が付いた青年が、さらに人でなしな言葉を吐き出した。ちつ、も

つと繋るような視線を向ければよかつたかな。  
・・・同じ結果になるような気もするけど。

「だつてさ、よく考へてもみなよ。君、いきなり知らないどこの人間かもわからない不気味な人間にわざわざ手差し伸べる人がいると思つ?少なくとも俺はそんなやついないと思つけど。」

「・・・不気味つて私の事つすか。」

「ほかに誰がいるのさ。」

どうしようこいつ本当にムカつくんだけど。殴りたい。そのお綺麗な顔面殴り飛ばしたいて、羨ましくらいサラサラな薄い青色みたいな奇妙な髪の毛巻りたい。・・・といふか、今まで突っ込まずにいたけどそんな髪色してお前の方が不気味だと思うぞ。コスプレデスカ?因みに目も青色。・・・外人さんデスか?まあ、外人さんなら目が青色でも不思議はないけど。なんでこんな日本語ペラペラなの。そんな容姿に恵まれていて尚且つ頭もいいとかだったらマジ殴り飛ばす。

私はそんな設定一次元しか許しません!!

あ、話が反れちゃつたね。とりあえず元に戻そつか。

「貴方に言われたくないません。それに、世の中は広いんです。そつと何も言わずに手を差し伸べてくださるお優しい方々だつているはずです。」

「じゃあ君が俺の立場だつたら何も言わずに手を差し伸べるの?」「差し伸べるわけないでしょ。」

「・・・・・・・・」

即答してやつた。そしたら青年は微妙な顔をした。どうだ参つたか。さすがにあの流れでそう答えるとは思わなかつただろう。ザマーミ

口。ハハハ。

・・・こほん。

「まあ、相手にもりますけどねえ。子供や老人や・・・お淑やか  
そうな女性なら、多分手を差し伸べるへりにはしますよ。」

「ふう〜ん・・・。」

「なんですかその疑うよつた眼は!」

「・・・いや、俺ならたとえ君が5歳くらいの子供だったとしても  
絶対にそんなことしないよなーって思つて。」

「それはそれは。・・・最低だな。」

「ぼそつと言つても聞こえてるか?」

「いや本当の事ですしぃ。」

「・・・・・・・・・

「もうそんなんあなたの事情なんてどうでもいいですか、さっさと  
諦めて私をあなたの家に連れて行つてください。本当に自分でもど  
うなつてんのか状況がよくわからなくてヤバいんですよ。」

「の割には全然そういう風には見えないんだけど。」

「当たり前じゃないですか。そんないつまでもいい大人がめそめそ  
していられませんよ。」

「というかあなたみたいな人の前でなく程愚かじやありません。と、  
いう言葉は飲み込んだ。これじゃ売り言葉に買い言葉になつてしま  
う。もう遅い気もするけど、きっとそれは氣のせいだ。私は速やか  
に泊めてほしいだけなのになんでこんなに苦労しなきやいけないん  
だろう。せめてもつと人情溢れる優しい人だつたらなあ・・・。」

私は、青年にはれないように、そお一つとため息を吐いた。その時、

「・・・ま、君面白そつだし。今回は特別に城に泊めてもうらえるよ  
うに交渉してあげる。」

「・・・えつ」

「俺に迷惑かけたら即刻追い出すけどね。」

天使様が舞い降りた。後に聞こえた物騒な言葉は気にしない。でも  
ちょっと待てよ。

・・・・・ しろつて言つた? この人。なんで。そこは百歩譲つても  
屋敷だろ? その言葉を理解していくうちに、だんだん自分の笑顔  
が引き攣つて行くのが分かつた。やっぱここって日本じゃない!?

「し、城つてなんですか?」

「城は城だよ。そんなこともわからないの?」

うわ~やつぱこの人ムカつくわあー。・・・一応恩人だから言わな  
いでおくけど。

「ほら、私宿とかでいいんですけど。」

「俺に金払えって? 冗談じやない。」

「・・・。分かりましたやつぱお城でいいです。もうどうでもいい  
です好きにしてください。」

「分かった。じゃあこっち来て。」

何を言つても無駄なんじゃないかと思い始めたのと、早くこの森から  
出たいという思いが数々の矛盾点への疑問及び青年の態度への反  
抗心に勝り、やや諦め口調でそういう私に、青年は少しも動搖す  
ることも無くそう促した。

なんでわざわざ彼の隣まで行かなければならないのかと思つたが、  
私は元来あまり物事を深く考へない性質バカなので、この時もさして何  
を言つてもなく素直に従つた。うん、この私の性格のせいで昔から  
相変わらずトラブルに巻き込まれたりしてばっかりなんだよねー本  
当学習能力無いからさ私。

・・・なんか自分で言つて悲しくなつてきた。やめとこ?。そん

な黒歴史を掘り返すのは。  
ダークメモリー

まあ、何が言いたいのかといつと・・・。

「・・・つえええー? うわつ! - - -?」

「うよつ、うるさこんだけど黙つててよ。」

いきなり元居た世界の常識ではありえない、魔法みたいなものではたまたわけのわからんといろへと飛ばされたのでした。だけど、それも一瞬の出来事。まさに瞬きする間に、私の目の前の景色は違うものになっていた。

「え・・・」何処?」

「城のすぐ近くだよ。やつそく王に君の」とついて許可取りおとしに行くから、ついてきてね。」

「はあ。」

・・・若干『許可取りに』の言葉が違う風に聞こえたのさきつと気のせい。むじろそうに違いない。そう無理やり自分を納得させて、私の目の前を歩く青年の後に続いた。無駄に長い廊下らうげりしきといろを通る。本当に、なんでお城つてこんなに廊下長いんだろ? ね。いや、私も城に入ったことなかつたけど。

・・・そもそも日本にこんな洋風なお城があるわけないしね。いや、偽物っぽいのならあるのかもしれないけど。

「・・・・・・・・・・・。」

どうじよつ。私こうこう沈黙嫌い。マワリノクウキガオモイヨ。なんか話題。話題落ちないかな。・・・考えてみれば、なんやか

あの。

何

「そういえば、私たち自己紹介してなかつたですよね。つてことでお互い自己紹介しましょう。私の名前は青羽。意外と可愛い者好きで、甘いものも好き。因みに辛いものも好き。あなたは？」

「…………ちょっと、それだけ？」

「二つ別にいいで、おはなじめな二んだな？」

「何か言いたげだね。」

貴方絶対に友達少ないですよね。

卷之三

駄目だこいつ。私はそう悟った。まず話題を振つてもそれを発展させてくれない。いやむしろ発展させよつともしていない。これは話題を振るだけ無駄かもしねれない。

そんなことを思つてゐるうちに、いつの間にか王の間っぽいところについた。・・・ちよつと違うか。うへん・・・謁見の間？・・・・

ある、どうでもいいか。

そう思つてゐると青年、カルロスは何の断りもなく一見すると重た  
そうなドアを男にしては細めの腕で軽々と開け放つた。意外とこの  
扉軽いのかな。意地でもカルロスが意外と強いんじゃないかだなん  
て思はない。

「お、おお。カルロスか。いきなりどうしたのだ？」

「お久しぶり・・・って程でもないですね。少しお願いことをしたくて。」

「お、お願ひ事・・・とは？」

・・・おい、なんか王様っぽい人めっちゃオドオドというかビクビクしてるけど。大丈夫なのかこの人。いやむしろ何をしたんだカルロス。絶対お前になにかされた態度だぞコレ。大丈夫なのかこの国！？どこかなんて知らないけど！

ちょっと王様っぽい人を氣の毒に思つた。だからって助けたりしないけどね。こっちだつてこれから的生活かかってるんだから。綺麗で優しそうな王妃様とかなら助けたかもしれないけど。優しい女性には紳士的に接しなきやね。

「はい。この子・・・青羽を、この城に住まわせていただきたいのですが・・・よろしいですよね。」

そういうてこり笑つたカルロス。わあ、恐怖

「ももももちろんだ。カルロスよ。アレック、案内してやつてくれ。」

「承知いたしました。」

「ありがとうございます。おうさま。」

「い、いや・・・それでは、私は執務があるのでな。こ、これで。」

「はい。」

あ、偉い。これは私の勝手な偏見でただのイメージだつたんだけど、王様つてなんだか働かないでぐつたらしてるだけだと思ってたのに。この王様はちゃんと働いてるんだ。これでそういった理由が、本当に執務の為でなくカルロスから一刻でも早く離れたいとかだつたら

失望するな。といつも怒る。そこは王様なんだからちゃんとしようよつて。・・・まあ、少なからずその理由もあるよう気がしないでもないけど。

といつも、王様に押し付けられたアレックって人が可哀想に見えてならないよ。本当に可哀想に。カルロスなんか押し付けられちゃって。いい人だつたらフォローぐらいはしてあげよう。できたらだけど。

いやいやそれよりも！王様そんなに簡単に了承しちゃつてよかつたの！？私の身元とか何位も聞かれなかつたけど・・・。そういうものなのかな？まあ、私にとつては多分その方が都合がいいんだし・・・。どうでもいいか。そんなことを思いながら、何を思うでもなく王様がいそいそとこの部屋を出ていくのを見届けた後、突然私たちの前にさつきのアレックと呼ばれた青年が立つた。

「青羽さま。お部屋へ案内いたします。カルロスさまはどうなされますか？」

あ、結構な好青年。印象的な赤い瞳に、銀髪。この国の人達は髪とか目とかいろいろカラフルだなー若干目に痛いとか思つたのは私だけの秘密。カルロスよりも筋肉質で男らしいな。中身はまだ分からぬけど。もしかしたら内心は泣いているのかもしれないけれど。・・・あ、なんかまだだんだん可哀想になつてきたからやめとこう。

「俺は今日のところは部屋に戻るよ。一応青羽がどこに部屋になるか教えてくれる？」

「承知しました。」

そういう一言一言話してから、カルロスは去つて行つた。ちょっと知つてゐるひと（つて言つても今日あつたばつかけど）がいな

くなつて寂しい。・・・とりあえず今日のところはもう嫌味を言わ  
れなくて済むのかと安心してこる自分もいるけれど。でも、なんだ  
かんだでお世話になつたつていうか・・・一応行くあてのなかつた  
私を助けてくれたんだし、後でお礼言つておこうかな。せうりと流  
されそうな氣もするけど。

「青羽さま。案内するので、ついてきてください!」

「・・・敬語や敬称は必要ありません。」

「荷詰や荷利は必要ない」  
セイ

「必要ありません。」

・・・じゃあ、私のことも敬称とか使わないでくださいよ。」

につっこり笑つてやつた。因みに参考はカルロス。あそこまで迫力のある笑顔はさすがに作れないけど。

「・・・分かつた。青羽。これでいいか?」

そうしたら、アレックも私に負けず劣らずの笑顔で・・・といふが、妙に清々しい笑顔でそう返された。ちょっとヒドキッと来たのはきっと氣のせい。

卷之二

「顔が赤いぞ。俺に惚れたか?」

「そ、そんなわけないでしょ！！」

なんか急に軽々しくなつてない！？いや、ずっと畏まつたままでいられるのはもつと嫌だけど。まあどうせならこういつ友達感覚で話

せるほうがいいよね。そんなこんなで私たちは言い合ひながらも、部屋へと向かつた。

「「」がお前の部屋だ。」

「・・・『デカいね。』

「城だからな。・・・それにお前は、カルロス様のお客人だ。」

客人とはちょっと違う氣もするけど・・・。

「カルロス、さんつてそんなに偉い人なの？」

「知らないのか！？」

「え・・・うん。知らない。」

それよりも氣になつたカルロスのことについて聞くと、すつ「」驚かれた。今日会つたばかりなんだからしようがないじやんか。ここに来たのだつて不可抗力みたいなものだし。

「はあ・・・。青羽、お前いつたい何者なんだ？」

「ええ？何者つて言われても・・・普通の人間だけど。」

「カルロス様とはいつ、どこで知り会つたんだ？」

「えつと・・・森の、湖のとこ。」

「・・・どこだそこは。」

「知らない。気づいたら森の中にいたから。」

「・・・うん。」

・・・なんかものす「」く可哀想な者を見る目で見られたんだけど。いや、自分でも自分が可哀想だとか思うけど。事故で車に轢かれたと思って、目が覚めたら全然知らないところにいたんだし・・・。うーん、今はそういうこともう考えたくないからやめておこう。アレックも深く聞く気はないみたいだし。

「まあ、何か聞きたこととかあつたら俺に言ひへくれ。明日から俺はお前専属の使用人になると思つから。」

「なんでそんなことわかるの？」

「田頃王のそばにござればこの後どうこう展開になるのかだいたいは予想がつべ。」

「ふーん。そういうものなんだ。なんか大変そうだね。」

「大変に決まっているだろう。・・・まあ、カルロス様の傍よりはだいぶマシな方だろ。」

・・・何故かは聞きたいような聞きたくないような。でも怖いからやつぱり聞かないでおくれとした。聞かない方が幸せなことだつてあるよね。そう思つて私はそつなんだと返事して、今日一日中歩き回つて疲れたこともあつ早く寝ることにした。

ああ、疲れた。もう言い返す氣にすらなれない。朝一番で体力と精神力をこれでもかつてくらいにそがれた私は、わざと大きく思いつきり相手にも分かつように大げさにため息を吐いてから、何故ここにいるのかの理由を聞いた。というか本当になんなんだろう?

「君はもう少しこの世界のことを知つておいた方がいいと思つたからさ。君の話を聞く限りじゃあ、君はこここの世界の人間ではなさそうだしね。」

「・・・分かりました。そういうことならつけていきます。支度とかしたいので、とりあえず出てつけてくださいます?」

「はいはい。しょうがないなあ。」

「・・・もうどうでもいいですよ。ひとつと出でつけてください。」

やけくそにカルロスを外に追いやつて、外に出る準備をした。クローゼットからきとこりを開いたら、色とりどりなドレスが。・・・うん、服装は昨日と同じでいいかな。私にこんな煌びやかなドレスを着る勇気なんてありません!! それなら、多少目立つたつていつもの服を着る! つてことで、昨日メイドさんから手渡された・・・その、ネグリジェっぽい寝巻を脱いで、傍に置いてあつた服を着る。髪は適当にくしで解いて、カバンも一応持つていぐ。多分これ十分もかかつてないな。女としてそれでいいのかとこいつ気がしないでもないけど、まあどうでもいいか。

「お待たせしました。」

「ああ、うん。・・・随分早いんだね。」

「そうですか?」

「うん。たいていの女性は30分以上かかるからね。まあ、俺としてはその方がいいけど。」

「はあ。まあどうでもいいですよそんなことは。早くこきましよう。」

「

「私も」同行してもよろしいでしょうか?」

「つえ?」

突然聞こえた声の方を向くと、そこにはアレックがいた。すごい。気配も何もなかつた。まあ、気配がわかるほど私はごくもないけど。いやいやそれより、いきなりどうしたんだろ? カルロスも疑問に思つたらしい。アレックに何でと聞いた。

「私は青羽様専属の使用人です。青羽様のお側にいて、護ることが私の仕事ですので。」

「そこは俺がついているから何の問題もないはずだけど?」「いや」というとき、カルロス様御一人では対処しきれないことも御座います。」

「それは俺に喧嘩売つてるの?」

「そういうわけでは御座いません。」

うつわあうなんか・・・修羅場? 加わりたくないなあ。なんて思つていたら、いきなりアレックに話を振られた。

「青羽はどう思う?」

「・・・つえ?」

「ついていつてもいいか?」

「私は別に構わないけど。いいんじゃない? 人数は多い方が。」

「・・・随分仲が良いんだね。」

「そうですか?」

「・・・」

あらり。黙り込んじゃつたよ。何かいけないこと言つたかなあ?

「・・・まあ、いいよ。わかった。さつさと行つて終わらせてこよ

う。」

「有難う御座います。」

「・・・・・別に。」

まあ、約一名不服そうな人もいるけど、私達はカルロスの移転の魔法で街へと行つた。魔法って楽だけど運動不足になりそうだよね。と、歩いて行く気満々だった私は密かにそう思った。

「んで、まずはどこに行くんですか？」

「どこか行きたいところとかはある？」

「いえ・・・まず、ビルに何があるのかすらわかりませんし・・・。」

「・・・では、人が多く集まる密集地帯へと行かれは方がよろしいかと思います。」

「じゃあ、まずはそこからね。あそこは安易に魔法も使えないから、歩いていくよ。」

「魔法が使えないところもあるんですか？」

「うん。まあ・・・面倒だから、説明は現地についてからにしようか。」

「分かりました。」

そうして私とカルロスとアレックの三人ははぐれないよう気に付けてながら歩き出す。今私たちがいるところも町だそうだ。技術とかそういうものはあんまり発展していないみたい。でも、私的には活気があつていいと思う。日本は住みやすいけど、空気とかは悪いからね。・・・ああ、でもやっぱり住み慣れたところが一番かな。

「もうそろそろ着くよ。」

「あ、はい。……って、もしかして、あれですか？」

「そうだけど。どうかしたの？」

「いえ……ちょっと、私の住んでいたところに似ていたので。」

「そう。じゃあ、何か調べてみればわかるかもしれないね。俺もそんなんに暇つてわけじゃないし、それはまた今度になるけど……。」

「そうですか……。でもまあ、何も収穫がないよりかはいいですよ。ありがとうございます。」

少し遠くに見える高い建物。そう、そこは私の住んでいたところ……つまり、日本の都会とあんまり変わらないところだった。なんだか懐かしいなあ。まあ、あくまで遠くから見た感想だから、中身はどうなつてるのかは分からぬけど。もしかしたら全然違うかもしないし。似すぎていても逆に怖いよね。

そんな都会な場所には、約十分ほどで着いた。

「私は手続きを済ませてまいますので、少々お待ちください。」「分かった。よろしくね。」

ああ、私の知つてる都会じゃない……。それは、近づけば近づく程に明らかになつていつた。たつた一つ、門番らしき人が立つてゐるところの扉からしか入れないらしい閉鎖された世界。同じ都会でも、ここより日本の方が断然いい。まあ、こういう体制をとつてゐるのにも、なにか理由があるのかもしれないけど。そんなことを思つていると、隣から声がした。カルロスだ。

「……ねえ。」

「なんですか? っていうか、近いですよ。離れてください。」「その敬語嫌なんだけど。」

「……はい?」

「だから、敬語やめてって言つてるの。君はいちいち確認しないと分からぬの？」

「……そんな嫌味なことばっかり言つて、一生敬語で話しますよ。

」

何なんだ突然。この人はいつも……って言えるほど、過ごしてもいいけど、とにかく唐突だ。そして片時も嫌味を忘れない。いやこれはもはや……癖？

だとしたらもう救いようがない。

「……君つて、頑固だよね。」

「そんなこと言われたことありませんけど。」

「そう。だとしたら、周りの人の優しさに感謝することだね。」

「……。」

というかそれカルロスにだけは言われたくないんだけど。それに、私がこういう態度をとるのはきっとこいつだけだ……多分。まあ、周りの人たちが優しいのは否定しないけど。皆、なんかいつもほんわかしてたからなあ。まあ、ここは心を落ち着かせて平和的に解決しよう。

「そうですか。もうそれでいいですよ。あ、ついでにあなたに対しての敬語はもう一生変わることはないと思います。……敬つてるわけではないんですけどね。」

つて、だめだめだめだ……」れじやあどつちかというと売り言葉に買い言葉ではないか！……あああ、私多分この人に毒されるよ。どんどん皮肉な発言しかできなくなつていきそうな気がするんだけど……。そうぞうしただけで怖い。それじゃあ、あの縦社会では生き残れない。

「すみません。言いすぎましたね。謝ります。」

だが敬語はやめない。今更やめられない。私のなけなしの意地とプライドにかけて！

なんて、妙にそれたことを考えていると、突然カルロスの顔が近づいてきて……。

「俺の方こそ悪かったよ。ごめん。でも、やっぱり敬語はやめてほしいかな。」

なんて言葉と共に、頬にキスが降ってきた。犯人はもちろん……カルロス。

「……つてめえ、ぶつ殺す！…」

「あ、敬語とれた？ つていうかなに、」ついこのもしかして初めてだつたんだ。」

「…………」

もはや言葉すら出ない。もういじ。ここに遠慮や敬語は必要ない！ なんかつまく誘導されたような気がしないでもないけど、もうやつぱ敬語にしてとか言われても絶対にそんなの聞いてやるもんか！ そのことで精一杯だつた私は、カルロスが頬にキスをするとき、ちようどこっちの方を向いていたアレックの方を向いて厭味つたらしくにやりと笑つたことになんて気づかなかつた。

そして、アレックが手続きを済ませてくれたので、私達は都会へと

足を踏み入れた。・・・思った以上にそこは凄かつた。これはもしかしたら私の知っている世界の何処よりも凄いかもしない。何て言つか、近未来的な？

・・・違つか。まあ、『想像にお任せすること』します。

「なんか・・・凄いとしか言つようがないね。『うこう所は』『うだけなの？』

「いや、そういうわけではない。数は少ないが・・・他にも『うこう所はあるわ。』

「でも、やっぱ『一番大きいのは』『うだけだね。』

「ふうん。『うなんだ。』

だからここに来たのかな？（カルロスの）移転魔法で来たから、どれくらい遠いのか分からぬけど。

「そんで、『う』に行くの？

「掲示広場。・・・まずは、だけどね。そこが一番ちょっとしたこの情報が集まりやすいから。」

「そんなどこあるんだ・・・。『う』に『う』にあるの？

「この密集地帯の『う』真ん中だね。」

「・・・それ、結構遠くない？」

見ただけでも、『う』の土地の面積はすさまじく広いのに・・・といふか、掲示広場そこしかないのかよ！－なんかここはいろいろ発展してゐなあとか思つたけど、不便な面も多いのかな・・・。

「まあ、遠いけど。魔法で行くわけにはいかないしね。」

「そいついえばまだ聞いて無かつたけど、『う』して『う』では魔法とかが使えないの？」

ちゅうどいいから今「ここ」で聞くことにした。「ここ」魔法がないわけじゃなさそうだし。だつて普通に空にありえないものが浮いていたりしてるよ。わあ不思議。

「魔法が使えないわけじゃないんだよ。ただ使わない方がいいっていうだけで。」

「どうして？」

「「ここ」の空間には、常に魔法の回線みたいなものが巡っているんだよ。だから、「ここ」の近くで魔法を使つたらその回線が乱れてしまうことがあるから、無闇に使えないんだよ。分かつた？」

「まあ、なんとなくは……。」

分かつたような分からなかつたような……。と、とりあえず、あんまり難しいことは考えすぎない方がいいと思つからうことについて考えるのはやめた。まあ、あれだよね。雷が落ちて停電になつてしましました的な状況になるつてことだよね。うん、私の説明つてわかりやすい！多分ね。

「はい。まあ、そんなこんなで、私たちは掲示板広場につきました！すつごい人多い。私の知つている都会（いわゆる東京）なんて目じやないほどに。」

大きな噴水の湖の周りに、たくさんの掲示板。因みに、広場を囲う様にしてこれまた膨大な数の掲示板。掲示広場つて言つてたの思わず納得してしまいそうなほどの量だった。

確かにこれだけ情報が詰まつていれば何かしらの手掛かりはつかめ

るのかもしない。でもさ、でもだよ？

「……これだけの中から、どうやって探していくってこのや……  
……。

正直言って、ひと回かかっても全部読める気がしないんだけど。

「……こんな、どうやって探していくばいこの……？」  
「そこには大丈夫だ。ちゃんとこの情報をすべて管理しているもの  
がいるからな。」

思わず独り言を呴いてしまつたけど、律儀にも其の独り言をアレックが拾つてくれて答えてくれた。ていうかこれだけの情報……しかも、誰もが適当にいろいろ書いていくのに、どうやって管理しているんだか。少なくとも、私の常識の範疇では收まらないような気がするんだぞ。

「どうだ？」  
「あそこ？」  
「……あの建物？」  
「ああ。」

そうこうでアレックが指差した場所は、広場を囲う様にしてたつている大きな建物。どういう建物なんだろうとか広場に入るとき思つたけど、そういうことだったんだ。いや、だとしてもこんなのがどうやって管理するのだろうか。ネット上のものでもなさそうだし……。どうしても気になつてしまつたので、聞いてみることにした。

「ん？……ああ、魔法で管理してるんだ。魔力の弱い人には見えない魔法でね。」

「ふうん？よくわからないけど、魔法ってやっぱすごいねえ。」

うん。やつぱりよくわからなかつた。だからもう諦めるよ。現代っ子でしかも技術が発展した国で生まれ育つた私には魔法つてよくわからない。

「アレックは見えるの？」

「いや、俺はそこまで魔力が高いわけではないからな。見えてはない。・・・それに、それが見えるのなんてカルロス様や限られた方々ぐらいだ。普通は見えないものなんだ。」

「じゃあ、管理されてるってこと、ここにいる人たちは知ってるの？」

「ああ、それは周知の事実だからな。だが、何を書いても絶対に何も言われないから、どんなことでも皆書くのに躊躇つたりはないな。」

「そなんなんだ？」

「そうだ。ただ管理されてるってだけで何を書いても許されるからな。」

「ふうん・・・それが犯罪的なことでも？」

「ああ。」

・・・なんか変なの。いや、でも言わないだけで秘密裏に有効活用されているのかもしれないし・・・。あんまそういうことって首突つ込まない方がいいよね。

つてことで、この話題はこれで終わらせることにした。

「とにかく、難しい」とは考へない方がいいよ。余計にこんがらがるだけだからね。話している暇があるんなら早くいいくよ。」

「承知いたしました。」

「・・・分かつた。」

多少カルロスの言い方に不満はあったものの、若干慣れてきてしまつたのと一々言い返すのも疲れるなと思ったことから、なにも言わないでおくことにしておいた。アレックも何も言つてないしね。まあ、様子を見てこる限り言える立場でもないんだと思つけど。

「うわ、中もす」こね。

「そりやあどうでもいいことだらけとはいえ、あれだけの情報を管理しているところだからね。・・・少し大げさな気もするけど、そこのは気にしたら負けだよ。」

何に負けるんだろう、とか思つてしまつたが、私もカルロスと同じようなことを考えてしまつていて口にはもちろん出れない。そこまで私馬鹿じやない。なんだか何言つてているのか分からなくなつてきただけ・・・うん、あれだよ。気にしたら負け。

「んで、これからはどうするの?」

「自分たちでほしに情報を探せる部屋があるから。そこで探していくつもり。こっちきて。」

やつして私たちが入つて行つたのは、三階にあつた検索室といつといふ。そこにはたくさんパソコンが置いてあつた。

・・・うん、パソコンだ。結構違うところもあるけど見た目はだいたい同じ。文字を入力するところが違うだけかな。指で自分で文字を書いて入力していくらしい。しかも画面タッチ機能か・・・。このパソコンらしきものの結構いいかも。面白そう。

ずらーっと並んでいっても、一つ一つ仕切りのようなもので区切られているから、他の人から見られる心配はなさそうだね。・・

・まあ、そもそもそこまで人いらないんだけれども。

私たちは、それぞれで手分けして調べることにした。

「「」」をこうすればできるから。」

「ん、分かった。」

カルロスとアレックに一通りやり方を教えてもらい、隣にあいてある文字表を見ながら文字を書いて打つて行く。なんかぐにゃぐにやしてて変な文字だな。因みに、この世界には何語とか何文字とかないらしい。国とかいう概念がないっていうか・・まあ、ある意味言葉の壁とかに困らなくていいと思うけど、日本人な私にはものすごい違和感。

まあ、そんなこんなで、振り分けられたキーワードを入力していく。まずは・・・『禁断』。

うわあ、なんか危険な香りが・・・なんでも、この世界ではいくつかの禁断の魔法みたいなのがあるらしくてね、異世界召喚というのもギリギリその禁断の類の枠に当てはまるらしいよ。ま、あくまでギリギリだから、そこまで重要視はされていないみたいなんだけれども。

いやいやそんなことより、検索結果。んー五十件くらい・・・? 読むの大変そうだな~。ああ、でも自分のことだし、頑張らなきやだよね。

いまいち気合が入らないまま、私はディスプレイをスクロールしてみていった。

『なんか最近妹が禁断の恋とやらに田代見めたらしきんだけど・・・  
どうじょひ』

・・・まあ、頑張れ。

『　　＼禁断の果実＞　　これで貴方の人生変わります』  
どうでもいいわつ・・・

『男性同士の禁断のこ・・・「づほつ、じほつ。」

「どうした？」

「な、なんでもない」

なんちゅーもん書いてんだあああああつ・・・・・

さすがの私もこんなところで注目は浴びたくなかったので、心の中で叫んだ。若干息が切れている。だつていぐら何書いてもいって言つてもこんなこと普通は書かないでしょ。どうこう神経してるのでこの人たち。

やめよう、一旦落ち着こうよ自分。と、とりあえずここに私の求めている情報はなさそだから、次行ってみよつかな。

次のキーワードは『異世界』。うん、これは妥当な考え方だよね。やつた本人（いるかもわからないけど）が、異世界のもの目的でやつたことだとしたらやつぱこのキーワードが一番ありそうな感じ。

『もう嫌だ、人生疲れた。異世界行きたい・・・』  
人生諦めたらそこで終わりなんだぞー。

『そもそも話異世界つてあるのかな・・・？』  
在るぞ。私がいい例。

『誰か異世界の召喚魔法できる人いませんか？・・・いないよね』  
おい、なに自問自答してんのこの人・・・。

・・・・・・・・・て、これはなんだか求めているのに近い感じ?  
もしかしたらあたり?

ちょっとどうしても気になってしまった私は、隣に腰かけて調べて  
いるアレックに聞いてみるとにした。

「ねえ、これはどうだと思つ?」  
「・・・可能性はあるかもな。調べてみるか。」  
「どうするの?」  
「筆跡を調べるんだよ。」  
「・・・筆跡?どうやって?」  
「見ていればわかる。」  
「・・・・・おおーーす!」  
「これ。便利。」

アレックが操作してくるうちに、あつという間に筆跡から書いた人の個人情報が出ていた。今はプライバシーの侵害とか考えないでおこづ。ここでは通用しないような気がするから。

そして数時間後。やつとだいたい調べるのが終わった。  
結構な時間がたつたのに、お皿。どうやらここに向こうの世界の時  
間軸は大幅に違うらしい。ま、いまさらそんなことで驚いたりしな  
いけどね。

「結構集まつたね。」

「うん。んで、今からここの場所全部行くの?」

「そう。まあ、ここから出れば魔法なんて使いたい放題なんだから、すぐに終わると思つよ。」

そんなカルロスのお言葉通り、この密集地帯の扉を出てしばらく歩いたところで、カルロスが移転の魔法を使い、調べ上げた多くの場所へ行くのになんに時間はかからなかつた。十何か所か行つたところで、やつとちょっと関連がありそうな所へとたどり着いた。

・・・とこりか、向こりからやつてきた。

「「めんなさい・・・。」

「・・・・・・・・・・・・」

え・・・どんな状況かつて、田の前に現れたべらぼうに可愛い男の子がことの首謀者らしく、ずっと一人で暮らしてて寂しかつたから、誰でもいいから話し相手が欲しくてやつてしまつたことらしい。因みに名前はフィストといふらし。素直に謝つて来てくれた。身長的には中学生と高校生の間つぽい。でも可愛い。本当に可愛い。抱きしめたいくらこ可愛いつ。

「・・・で、君は許すの?」

「まあ、そういう理由なら仕方がないですよね。元の世界に帰してくれるんなら許しますよ。」

「・・・・・・・・・・・・」

え・・・ちよ、なんでそこで皆黙るの・・・なんかすゞい嫌な予感がするんだけど。

「えーと・・・それが・・・。」

「ま、まさかもう帰れないとかいつ『気じやないよねー?』

「いや、可愛くてもそれだけは許せ。」「めんなさー?」  
「。」

負けるな、私。しゅんとしている姿もとてつもなく可愛くてものすじぐ同情心をあおるけど・・・や、それとこれとは問題は別。そもそも私こんな世界で生きていける気がしないんだけど。

「お願いだから、ちやんと言つてよ。」

「僕が使えるのは召喚魔法だけだから・・・元の世界に戻すことはできないんだ。」

「・・・ま、もともと召喚魔法でさえすこじぐ高度な魔法だからね。送還なんて今もほとんど謎な魔法だし。できたとしても、元居た場所に戻すことは難しいと思つよ。」

「そんな・・・カルロスはできないの?」

「俺の専門はそつちじやないから。得意じやない魔法をやろうとしても失敗するだけだよ。」

「・・・アレック・・・。」

「・・・助けてやりたいのはやまやまだが生憎俺は魔法はほとんど使えない。悪い・・・。」

「・・・ま、何かあつたら協力するから、それまではずっとここにいる駄目だ。ここに頼れる人いない。」のままじや私力エレナイ・・・。

「・・・ま、何かあつたら協力するから、それまではずっとここにいる

世界にいればいいんじゃないかな。」

「ああ。その方が俺としても嬉しい。・・・青羽、何かあつたら俺に頼れ。できる範囲の事なら、なんでもしてやる。」

「それなら、ずっとこの屋敷に住めばいいよ。生活は保障するからつ！」

そんなことが聞こえたような聞こえなかつたよつな・・・とにかく、私の旅は再び振り出しに戻つたのでした。

「・・・よしひー・ゼーッタイに送還の魔法使える人を探して見せる！――！」

そして本当は送還魔法がありふれたものだつたなんて私は死ぬまで知らずに生きてゆくのでした。

やうやくして、私が三人から猛烈なアタックを受けながら若干軟禁された生活を送るのはもう少し先のお話

『事故にあつた私は異世界にて、もとの世界に帰る方法を探し続けたいと思います。』

元の世界の青羽はもう故人なんて誰も知らない。

(後書き)

なんか主人公報われてない・・・?  
・・・ま、いいかww

気に入られた方はお気に入り登録おろしくオネガイシマスっ!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0164z/>

---

事故にあった私は異世界にて

2011年11月30日21時46分発行